



身近な“あたりまえ”からあらためて考える人権 ～すべての人が尊重される社会とは～

栗本 敦子 さん Facilitator's LABO [えふらぼ]

講座2では、栗本敦子さんに「身近な“あたりまえ”からあらためて考える人権 ～すべての人が尊重される社会とは～」と題してご講演をいただきました。また、ワークショップ形式の時間があり、参加者どうしで意見交換が行われました。今回は、講座の一部を紹介します。



「ふつう」について考えてみましょう。

次の文章にでてくる「ふつう」という言葉の使い方に、「気になること」や「ひっかかること」はありませんか。「ふつう」という言葉は、どのような意味や意図で使われているのでしょうか。その場にあなたがいたとしたら、どのように対応するのでしょうか。また、どのような“危うさ”があるのでしょうか。

【状況1】 何人かで雑談をしていたとき、ある人が同性愛者について差別的なことを言いました。それに対してAさんが「そういう言い方はよくないと思う。性のあり方はさまざまなんだから」と言ったところ、「もしかして、あなたも同性愛なん？」ときかれたので、Aさんは「ちがうよ、わたしはふつうやけど」と答えました。

【状況2】 Bさんは被差別部落（同和地区）の出身です。職場の人権研修をうけた帰り道、同僚に「じつは、わたし部落出身やねん」と話しました。それに対して同僚は「え、そうなん？ Bさん、ふつうやし、ぜんぜん気づかへんかったわ」と言いました。

※【状況】は、他にも例が3つあげられていました。

これらは実話がベースです。例えば状況2は、当初Bさんも「ん？」と思ったのですが、その場は話が流れました。地元に戻り「こないだこんなことがあってさ」と話したら、仲間に「あんた、それおかしいやん」と言われ「やっぱり、これちょっとおかしいよな？」という感じで認識し直しました。言われた瞬間には「その“普通”って、どういう意味？」と反応することができず、曖昧な感覚に陥ったという話です。

栗本さんからのメッセージ

『差別原論〈わたし〉のなかの権力とつきあう（好井裕明著）』には、「普通であること」は、決して私たちに“差別をしない”保証を与えるものではない。むしろ、そこに安住することで、世の中にある差別は、確実に生き延びて、育っていくだろう。つまり、私たちが深く考えることなく“普通に安住すること”は、差別にとってこのうえなく良い“こやし”となるのだ」と書かれています。“普通”という言葉を使ってはいけなとか、駄目ということではありません。深く考えることなく普通に安住することが、差別の肥やしを作っていくことになるのです。

みなさん、自分と違う立場の人が、「どんなふうを感じるのかな」「どういう状況に置かれてるのかな」ということを、理解しようと努力してみてください。想像力や共感、気もちの問題というよりも、いろいろな社会の現実を知ることによって生まれてきます。これは、感情というより、頭で理解することのできる想像力ではないかと思います。このような力を伸ばし、子どもたちや保護者のいろいろな背景について理解することで、一人ひとりがそのまま生きていける世の中につながっていくと思います。これらの行動は、すべての人が尊重される社会をめざすことにつながるのではないのでしょうか。



【参加者のアンケートから】

- 栗本さんの講義だけでなくグループで考える時間があり、周りの方の意見を知ることができ参考になりました。
- 「ふつう」という言葉に隠れている意図を認識し、その危うさにハッとしました。私も「ふつう、そうはならない」とか「ふつうは、こうだよ。大丈夫」と、自分のモノサシで人に話したり、価値観を押し付けたりすることがありました。これは、「無意識のうちに相手を分類し傷つけていたかもしれない」と反省しました。
- 「無意識こそが鍵である」という話が印象的でした。当事者は多数派であるという自覚がないということは、様々な場面であるように思いました。これからは、少し立ち止まって言葉を選んでいきたいと思います。

